大患難期の前に起きる事

第二部　時系列での推定配置　9つのこと

第1次ローマ・ユダヤ戦役　エルサレム陥落・神殿崩壊　紀元 70年
第2次ローマ・ユダヤ戦役　偽キリスト登場・地名はパレスチナに　紀元135年
→　イスラエル民族の世界離散

① 世界離散することは、モーセが預言していた（申命記 28：15～68、31：16～32：44）
② 国々の領土は、離散するイスラエル民族を受け入れることを織り込んで、神が定めておられる（申命記 32：8～9）

A) 第一次世界大戦と第二次世界大戦（1914年～1945年）

① マタイ 24：7・・・「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上げる」
- 同じ表現が使われても、その地理的範囲は文脈による
  - ➢ イザヤ 19：1～4（エジプト全土）
  - ➢ Ⅱ歴代誌 15：1～7（中東全域）
- マタイ 24章は、世界全体を意図している（14、21、31節）
- ラビの用語：メシアが来る前に起きる世界的な戦争を指す
- 第一次世界大戦→シオニズム運動、第二次世界大戦→イスラエル建国
- 世界大戦とともに、飢饉と地震が頻発するようになる

② 「産みの苦しみの初め」（マタイ 24：8）

B) イスラエルが再建国される（1948年）

① イスラエルの世界規模での帰還についての預言は、帰還が 2 回にわたることを示している。第1回目は、不信仰の中での帰還。2回目は信仰をもっての帰還。
② まず、不信仰の中での帰還
- エゼ 20：33～38（不信仰の中での帰還、37節の「むち」は大患難期）
- エゼ 22：17～22（エルサレムは苦難の『溶鉱炉』となる）
  - ➢ イザヤ 1：22、25、48：10、エレ 6：27～30、9：7、ゼカ 13：9、マラ 3：2～3
- エゼ 36：22～24（回心の前に帰還）、そして25節で「きよめられる」
- ゼパニヤ 2：1～2（大患難期の前に、不信仰の中での帰還）
  - ➢ 「主の怒りの日」とは、大患難期。「主の日」とも呼ぶ。

③ 大患難期のあとに、2回目となる帰還。これは、イスラエル民族が信仰をもっての帰還である。

- イザヤ 11：11～12
  - 「再び」とあるが、原語は「2 回目」を意味する。英語訳では、「again ,the second time」
  - 「地の四隅から」とある。これは、世界規模での離散からの帰還

④ 大患難期の始点は「7 年条約の署名発効」であり、「携挙」ではない。条約を結ぶためには、ユダヤ人の国家が存在していなければならない。よって、イスラエル建国は、「産みの苦しみの初め」のもうひとつのしるしである。そして、それは不信仰の中での帰還である。

C) エルサレムがユダヤ人の支配下になる

① 大患難時代の中間で起きることは、エルサレムの神殿に関係している

- ダニ 9：27、マタ 24：15、Ⅱテサ 2：3～4、黙 11：1～2

② 1967 年、六日戦争で成就

D) 北方の連合軍がイスラエルに侵攻する

a 侵略者はだれか（エゼ 38：1～6）

① ゴグ＝マゴグの地のリーダー

- 彼は、ロシュ、メシェク、トバルの地域のリーダーでもある
- 「ゴグ」は支配者の呼称であって、個人名ではない
- マゴグ、ロシュ、メシェク、トバルといった古代世界の部族が領有していた地域は、現代のロシア
  - マゴグ、メシェク、トバルは、黒海とカスピ海の間の地方。今日のロシア南部地域、イランとトルコの一部を含む
  - メシェクから「モスクワ」（首都）、トバルから「トボルスク」（シベリアのウラル地方の都市）
  - ロシュは今日のロシア北部地域にいた。ロシアの名前の語源。

② 北の果て（38：6，15、39：2）・・・イスラエルの北の果ては、ロシア

③ 連合軍（38：5～6）

- ペルシヤ・・・今のイラン
- クシュ・・・旧約ではメソポタミヤを指すのは1回だけ（創世記 2：13）、あとはすべてエチオピヤを指す。現状をみてシリヤやイラクといったメソポタミヤ諸国を指すと解する傾向があるが、聖書の文脈からいうと、エチオピヤと考えられる。
- プテ・・・今のリビヤではなく、ソマリヤを指す。ソマリヤはエチオピヤの隣国である。
- ゴメル・・・現在のドイツに住んでいた。ミドラッシュではゴメルを「ゲ

ルマニヤ」と呼んでいる。タルムードも同じである。

- トガルマ・・・現在のアルメニヤ。

④ 連合軍には、アラブ諸国の名は一つも出てこない。イスラム教国はあるが、それらはアラブではない。地理的には、イスラエルの北と南の諸国。侵攻は北から。

b どこに侵攻するか（エゼ 38：7～9）

① イスラエルの山々

② 不信仰の中で帰還したイスラエルが国を造っていることが前提。この侵略のあとで、多くの人々が主に立ち返るのだから、侵攻の前に、不信仰での帰還。

③ 8節でイスラエルの状況が預言される

- その国は剣の災害から立ち直った
- その国は多くの国々の民の中から集められた
- その国は久しく廃墟であった山々に住んでいる
- その民は国々の民から連れ出された

c ロシアの側から見て、この侵攻の目的は何か（エゼ 38：10～13）

① 略奪（38：10～12）・・・対象は具体的に記されていない。「家畜や財産、銀や金」という表現は、旧約聖書が略奪戦争を一般的に示す表現である。

② 本音は中東の資源が目当て、しかしイスラエル攻撃を口実に中東に介入すれば、アラブは黙認すると判断して侵攻。しかし、13節に、ロシアの目的が略奪であることを見抜いた一部のアラブ諸国の反発がでてくる

- シェバ・デダン・・・北アラビアの諸国

③ ロシアの動向に対して、国際社会は反発する（エゼ 38：13）

- タルシシュ、続いて「そのすべての若い獅子たちと共に」・・・ヘブル的表現で、タルシシュから出たすべての諸国民・・・歴史的には3つの地域がある。
  - ひとつは、アフリカの東海岸にあったとされるが位置は特定されていない。
  - 二つめはスペイン。タイラという町を建てた。もしこれだとすると、ブラジルを除く中南米の諸国すべてを含むことになる。
  - 三つめはイギリス。もしこれだとすると、米国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、そして西側民主主義諸国を指すし、さらにイギリスの植民地連邦までも含むかもしれない。
- 反発は、抗議の段階にとどまる。

d 神の目から見て、この侵攻の目的は何か（エゼ 38：14～16）

e 侵略者たちが壊滅する（エゼ 38：17～23）

① ロシアがイスラエルに侵攻することで、ロシアの罪悪の杯は満ち、神の「ひ

とみ」（申 32：10）に触れたことになる、ここに神の怒りが燃え上がり、侵略軍を壊滅させるという裁きが下される。その方法は次のとおり。

- 地震（19～20）
- 内乱（21）
- 疫病、流血、豪雨洪水、雹、火、硫黄（22）

f　壊滅の場所はどこか（エゼ 39：1～6）

① 連合軍が、イスラエルの山々において壊滅する
  - ➢ 北は、イズレエルの谷の南端、ガリラヤのジェニンという町
  - ➢ 南は、ネゲブのベエルシェバの北端
- この地域に含まれる町々・・・ドタン、シェケム、サマリア、シロ、ベテル、アイ、ラマ、ベツレヘム、ヘブロン、デビル、エルサレム
- 侵攻軍の目標は、エルサレムであろう

② ロシア本国も破壊される（39：6）
- 火を放つ＝硫黄の雨が降る
- これにより、ロシアは世界政治の舞台から消える→ダニエルの第四の国が、二分立段階から世界統一政府段階へ移行する引き金となる

g　神の名がほめたたえられる（エゼ 39：7～8）
- 神の名が、異邦人諸国の間だけでなく、イスラエルにおいてもほめたたえられる。こうして、イスラエルにおいてリバイバルが起き、その結果、多くのユダヤ人が主に立ち返る。

h　残留兵器の焼却処理に 7 年間を要する（エゼ 39：9～10）

i　戦死者の遺体回収処理に 7 か月を要する（エゼ 39：11～16）

① 埋葬の場所は、地中海から東の谷のひとつ（11）、死海の上のヨルダン渓谷の中と推測される。谷の名は変えられる。

② 遺体（群衆）の多くがクレバスに落ち込んでいるので、特殊部隊を編成して 7 か月にわたり、捜索、回収、埋葬をする。

③ 埋葬地を監視するために新しい町が建てられる。その名は「ハモナ（群衆）」。

E）世界統一政府が樹立される（ダニ 7：23～24）

① ダニエル書 2 章と 7 章の世界的覇権国家の預言
- 第一の国＝バビロニヤ
- 第二の国＝メディヤ・ペルシャ
- 第三の国＝ギリシヤ
  - ➢ 統一段階
  - ➢ 四分立段階
- 第四の国
  - ➢ 統一段階＝ローマ

- ➢ 二分立段階＝東西の力のバランス
- ➢ 世界統一政府の段階（7：23）
- ➢ 十分立段階＝10人の王（7：24）　この時期に大患難期に入る
- ➢ 反キリストによる世界支配の段階（7：25～26）
  - ✧ 「ひと時とふた時と半時の間」＝3年半（大患難期後半）
- ● メシアの王国（7：27）

F) 世界統一政府の体制を改めて、世界を10の地域に分け、それぞれにリーダーが立つ。10人の王（地域リーダー）による統治体制（ダニ7：24a）

- ● ＥＵ諸国だけを指すものではない。世界全体を支配する国が10。
- ● この10人の王による統治体制は、大患難期の前半（3年半）まで続く。

G) 反キリストが国際社会の政治リーダーのひとりとして登場する（ダニ7：24b）

① 世界は10人の王によって地域別に統治されている状況である。110人のうちの誰かひとりの管轄地域に中から、ある小国のリーダーとして、反キリストが登場する。

② Ⅱテサロニケ2：1～3　主の日（＝大患難期）の前に起こるべき二つのこと

- ● 背教（直訳「出発」・・・携挙を指す）
- ● 不法の人（the man of sin）、滅びの子（the son of perdition）が現れる

③ この時点では、誰が反キリストか、確実に判定する方法はない。黙13：18により名前を数字化して、「６６６」になったとしても、それだけでは断定できない。他の人でも名前によって６６６になることは、あり得る。

④ しかし、ともかく、彼は国際社会で知られるようになる。そして後日、イスラエルと国家間の条約に署名するほどの政治的パワーを持つようになる。

H) 平和と見せかけの安全の期間（Ⅰテサ5：1～3）

- ● 世界が10人のリーダーたちの支配下にあり、反キリストが登場してくる時期は、平和と見せかけの安全の期間である。
- ● Ⅰテサ5：4～5には、教会の信者たちは「光の子ども」であるから、主の日が盗人のように襲うことはないと預言されている。教会の信者たちは、大患難期の前に携挙される。

I) 7年条約（ダニ9：24～27）

① 反キリストとイスラエルが、国家間の条約を、7年の有効期間をもって締結する。おそらく、イスラエルの安全保障に関する重要な条約であろう。

② イザヤ28：14～22には、神の目からはこの条約がどのように見えるのか、預言されている。15節「死と契約を結び、よみと同盟を結んでいる」

③ これをもって、大患難期が始まる。

時系列での配置を推定できない３つのこと

A) 暗黒・第一回目

① 「暗黒」というのは、太陽、月、そして星の光が突然遮断されて、地上にこれらの光源からの光が全く届かない状態、完全な暗闇の状態をいう。

- 類例としては、
  - 出エジプトのときのエジプトの暗黒（出 10：21～23）
  - 十字架刑のときの暗黒（マタ 27：45）

② 聖書は、大患難期の前に 1 回、大患難期の中で 4 回、計 5 回の暗黒が起こると預言している。

③ 第 1 回目の暗黒（ヨエル 2：31）

B) 預言者エリヤが遣わされる（マラキ 4：5～6）

① 5 節：「主の大いなる恐ろしい日」（＝大患難期）の前に、エリヤが来る

② 6 節：エリヤの使命は、ユダヤ人の家族の結びつきを回復すること→メシアの再臨に備える

③ エリヤとバプテスマのヨハネとの関係

- エリヤは再臨の前、大患難期の前に来る
- 先駆者は初臨の前に来る
  - マラキ 3：1
  - イザヤ 40：3～5　→　マタイ 3：1～6、11：7～10、ヨハネ 1：23
- バプテスマのヨハネは、エリヤではない
  - ヨハ 1：19～23
  - マタ 17：9～11
- イエスは、もしユダヤ人たちが拒否しなければ、ヨハネはエリヤの使命を果たすはずであったと言った
  - マタ 11：11～14、17：12～13
  - ルカ 1：13～17　「エリヤの霊と力で主の前ぶれをし」

C) 第三神殿

① 聖書の箇所は次の 4 か所、いずれも大患難期の後半期の最初で起きること。よって大患難時代の前半期に再建される可能性もある。

- ダニ 9：27
- マタ 24：15
- Ⅱテサ 2：3～4
- 黙 11：1～2

② この神殿は、神の家とは認められない（イザヤ 66：1～6）